

新聞を活用した情報読解力の育成

—中高等部によるNIEの実践—

橋本祥夫・河合晋司・西田直記・植田智史

(京都教育大学附属京都小中学校)

Promotion of information comprehension power that uses newspaper

— Practice of NIE by middle part and advanced level part —

Yoshio HASHIMOTO, Shinji KAWAI, Naoki NISHIDA, Satoshi UEDA

2011年11月30日受理

抄録：附属京都小中学校は、平成23年度から2年間、日本新聞協会からNIE実践指定校に認定された。本稿は、その1年目の取り組みをまとめたものである。本校は小中一貫学校として、初等部、中等部、高等部の4-3-2制を取り入れている。NIEの実践は、5年生から9年生までの中等部と高等部で取り組んでいる。NIEの実践校の取り組みとして、小学校、中学校の実践はそれぞれにあるが、小学生から中学生までの一貫した取り組みは数少ない。今年度は、各学年でどんな取り組みができるのか試行的に実践してきた。今年度の取り組みをもとに、小中一貫学校としての特性を生かし、発達段階に応じたNIEの実践について考察したい。

キーワード：NIE, 情報読解力, 新聞活用, 新聞づくり, 新聞スクラップ, 社会科教育, 総合的な学習

I. はじめに

NIEの内容は「新聞を学ぶ」「新聞で学ぶ」「新聞をつくる」に大別され、この3要素をうまく実践するためには、「新聞に親しませる」ことが重要である。そのため、小学校においては、特に「新聞に親しませる」ことに重点を置いた取り組みがされてきた。しかし、「新聞に親しませる」段階で終わり、新聞でどのような力を身につけていくのか、そこからの発展がなかなか見られない。NIEの実践の効果は一年だけでは見えてこない。発達段階に応じた継続的な指導が必要である。本校では、5年生から9年生までが共通して新聞スクラップの実践を行い、さらに発達段階に応じた新聞活用を取り入れることで、段階的にNIEによる学習効果を上げようと考えている。

新聞の役割、使命は、大きく分けて2つある。一つは読者が「知りたい」と思っている事実を客観的に広く伝える報道機関としての役割であり、もう一つは、情報を分析し、「こうあるべきだ」「こういう方向を目指せ」と論評・主張する言論機関としての役割である。NIEでつけられる力には、様々なことが考えられるが、本校では、新聞のもつ本来の役割、使命に基づき、新聞からの情報を読みとる力（情報読解力）の育成に重点化して取り組みを進めたいと考えた。

その場合、新聞記事を読みとるには、初等部（4年生まで）では難しい。初等部では、「新聞に親しませる」ことが中心となる。写真や見出しを活用し、教師が記事を提示することが多くなり、生徒が自ら記事を読み進めることはまだ十分にできない。そこで、一貫した情報読解力を育成する取り組みとして、中高等部の5学年で取り組むこととした。また、新聞から情報を読みとることとの関連が深いと考えられる社会科を中心に取り組み、各学年の社会科担当が各学年のNIEの取り組みの中心となった。

II. NIE実践の枠組み

1. N I Eの教育課程上の位置づけ

これまでN I Eの実践は、各教科、領域で、それぞれに目標を設定し行ってきた。したがって、同じN I Eという実践で、新聞を使うことは共通していても、N I Eに求めるものはばらばらであった。そうした状況の中で、2005年に日本N I E学会が設立され、これまでのN I Eの実践を理論化する取り組みが進められた。2008年から本学会で「N I Eの教育的効果」検証の研究プロジェクトが立ち上がり、N I Eの実践が多い、国語、社会、総合的な学習で「情報読解力」の育成を目指す取り組みが始まった。これまでばらばらだった各教科、領域で行うN I Eの実践の目標が、「情報読解力」の育成で、一つに方向性が示されたといえる。

しかし、「情報読解力」の内容は、各教科、領域で、それぞれに異なる。それは、各教科、領域には、それぞれに固有の目標と内容があるからである。

本校では、社会科を中心にしつつ、国語や総合的な学習などの他の教科との関連を図りながら「情報読解力」を育成していきたい。

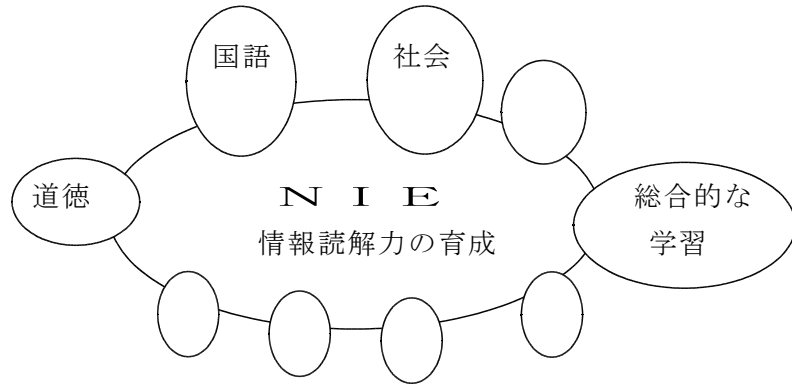


図1 N I Eと学校教育活動

2. 社会科における「情報読解力」の育成

N I Eを取り入れた社会科学習でどのような力の育成を目指すかについては、社会認識の形成、社会科リテラシー、意思決定力、メディア・リテラシーの育成など、様々な力の育成が議論されてきた¹⁾。そうした中で、2008年から日本N I E学会では「N I Eの教育的効果」検証の研究プロジェクトが立ち上がり、「情報読解力」の育成を目指す取り組みが始まった²⁾。2009年には、この中の社会科チームが社会科で目指す情報読解力を提案した³⁾。この段階でN I Eを取り入れた社会科学習でどのような力を育成するかについて、「情報読解力」の育成が一定の方向性として示されたといえる。しかし、課題で示されたように、「小・中・高、各発達段階において、社会科でどこまでの情報読解力を求めるか、さらなる検討を要する」こととなり、内容についてはこれからの問題である。前述した社会科チームが提案した「社会科の情報読解力の定義」は以下の通りである⁴⁾。

- ①社会的事象や問題を「読み解く力」すなわち、それらを知るだけでなく背景を熟考し、自分なりの意見や考えをもち、それを表現しながら社会への参加・参画を考える力
- ②変化の激しいこれからの時代を生きる市民の求められる、公的資質の育成につながる思考・判断・表現が結びついた力
- ③社会の現実や課題についての興味・関心や学習意欲が低下してきている今の子どもたちに最も足りない力

小原友行(2004)は、社会科で育成することが求められるリテラシーとは、社会的事象や問題を『読み解く力』であるとし、「社会的事象や

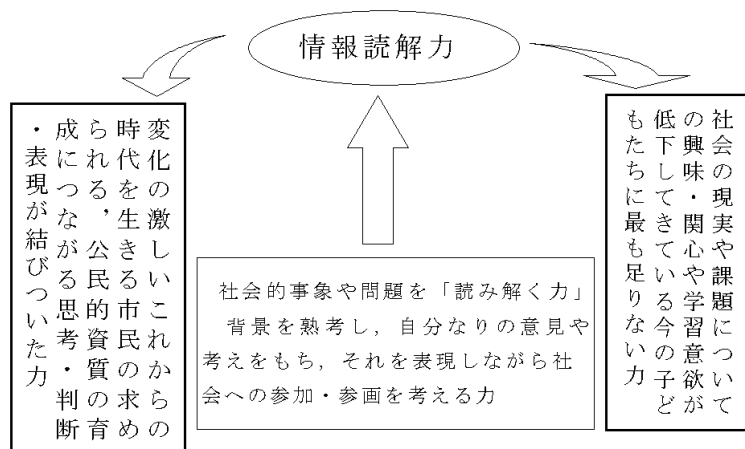


図2 情報読解力の概念

問題を読み解く力」の重要性を指摘した⁵⁾。小原によれば、それはすなわち、社会的事象が「どのような」ものかを認識し、「なぜ」と問うことでその原因を探求し、さらに「どうしたらよいか」という社会的な判断までを行う力としている。つまり、社会的事象や問題を知るだけではなく、背景を熟考し、自分なりの意見や考えをもち、それを表現しながら社会への参加・参画を考える力と捉えている⁶⁾。したがって、「情報読解力」の定義としては、①を中心概念とし、「情報読解力」を身につけることで、②や③の力が身に付くと捉えるべきである(図2)。

「情報読解力」として育成する能力として、以下の5つの能力が示されている。

- ①問題発見力…社会的事象や問題に対して、具体的な活動や体験を通して働きかけることによって「社会を知る」「社会がわかる」ための問題を発見することができる力
- ②情報受信力…「社会を知る」ための問題「どのように」「どのような」を解決していくことができる力
- ③探究力…「社会がわかる」ための問題「なぜ」「どうして」を解決していくことができる力
- ④意思決定力…「社会に生きる」ための問題「どうしたらよいか」「どの解決策がより望ましいか」を解決していくことができる力
- ⑤情報発信力…解決した情報を発信していくことができる力

これらの力の育成は、社会科学習の中に組み込むだけではなく、新聞スクラップや新聞スピーチのような常時活動の中でも身につけることができる。新聞を継続的に読んでいくことが求められるNIEでは、むしろこのような教科外の常時活動での実践の方が効果的である。そこで本校では、5学年共通で行う実践として、新聞スクラップを行った。その上で、各学年の学習内容、発達段階を考慮し、学習時間でNIEを取り入れていった。

3. 発達段階に応じたNIE実践の枠組み

1, 2年生は、まだ自分で新聞を読むことができないので、「新聞に親しむ」段階である。

新聞スクラップでは、主に写真をもとに、気になる記事を探す。記事を自分で読むことができないので、記事の内容は教師がわかりやすく説明してあげることが必要である。この時期は、親子と一緒に記事を読むファミリーフォーカスも重要である。ファミリーフォーカスによって、新聞が身近なものとなり、新聞を読むきっかけを作ることになる。

また新聞をもとに親子で機会を作ることによって、家庭によりよい言語環境を作ることにもなる。各教科での新聞活用は、国語で習った漢字を探したり、生活科で新聞から季節感のある記事を探したりする活動などがある。

3, 4年生になると、少しずつ新聞が読めるようになってくる。この段階は、新聞の役割や特性を学ぶ「新聞から学ぶ」段階である。

新聞スクラップでは、自分の関心がある記事を選んでスクラップをすることができる。各教科での新聞活用は、国語の学習で、新聞づくりの学習があるので、この時期から新聞づくりの活動を行う。新聞づくりは、各教科や総合的な学習のまとめにも活用できる。また、国語の学習の中に、インタビューや取材の方法、メモのとり方などの学習があり、社会科でも新聞記事から社会事象の問題に気づかせる学習があることから、新聞の役割や特性を学ぶことができる。

1年生から4年生の初等部の段階は、新聞を十分に読むことができないため、情報読解力の基盤づくりといえる。

5年生からは、自分が関心がある記事だけでなく、様々な記事を読んで、自分なりの考えをもつことができるようになるので、5年生から7年生の中等部は「新聞から考える」段階である。

図3 各学年の発達段階に応じたNIE実践

学 年	NIEの目的	情報読解力との関わり	NIEの実践例		
一年生	新聞に親しむ	情報読解力育成の基盤づくり	各教科での新聞活用	新聞スクラップ	新聞づくり
二年生	↓				
三年生	新聞から学ぶ	情報読解力の育成	↓	↓	↓
四年生	↓				
五年生	新聞から考える				
六年生	↓	↓	↓	↓	↓
七年生	↓				
八年生	新聞を読み解く				
九年生	↓	↓	↓	↓	↓

5, 6年生では、国語の学習で、新聞の編集の仕方や記事の書き方を学ぶ学習がある。そこでは、新聞記事や投稿の読み比べ、記事やコラムの書き方などを学ぶ。このように新聞とはどういうメディアなのかをしっかりと学ぶことで、新聞を正確に読みとることができる。また、社会科の学習では、5年生の産業学習で、新聞から日本の産業の様々な問題や課題を考えることができる。6年生の公民学習でも、日本の政治や社会問題について新聞から考える学習ができる。メディアリテラシーについての学習は、社会科で5年生、国語で6年生の学習にある。このように、5年生から新聞記事を読んで、社会の様々な問題について考えることができることから、5年生以上を情報読解力を育成する段階と位置づけた。

新聞は中学生が読める漢字、語彙を基準に作られている。したがって、中学生では、新聞を社説やコラムなどの読み取りもさせていき、新聞から必要な情報を読み解くことができるようにしていきたい。

7年生では、国語の学習で、新聞の紙面構成をもとに、必要な部分を探して情報を読みとる学習がある。5年生から7年生までの段階で、新聞から必要な情報を取り出し、それについて考え評価し、自分なりの考えや判断をすることができる力をつけたい。これはPISA型読解力⁷⁾でもある。

8年生からは、情報読解力の最終段階として、新聞から社会的事象や問題を知るだけではなく、背景を熟考し、自分なりの意見や考えをもち、それを表現しながら社会への参加・参画を考える力をつけていきたい。そこで8, 9年生の高等部は、「新聞を読み解く」段階とした。

8年生では、国語の学習で、新聞や雑誌、コンピュータや情報通信ネットワークなどの様々な情報手段、学校図書館などから得た情報を比較することにより、それぞれの情報手段の特徴及びそこから得られた情報の特徴について考えさせる学習がある。これは、メディアリテラシーの学習であり、情報の背景をクリティカルに読みとることを求めている。また、社会科の地理的分野の学習では、新聞記事から日本や世界の様々な現代的な問題や課題について調べ考えることができる。これらの課題には、様々な要因や背景があり、解説記事やコラム、社説などを手がかりに、多様な考えを知り、自分なりの考えを確立していくことができる。歴史的分野の学習では、近現代史の学習で、新聞が果たしてきた歴史的意義を学ぶことができる。こうした学習を通して、メディアとしての新聞の役割を認識し、そこから伝えられる情報をクリティカルに読み取れるようにしたい。

9年生では、国語の学習で、論説や報道などに盛り込まれた情報を比較して読む学習がある。ここでは、書き手が論説の対象として取り上げた物事について、どのような立場からどのような論を展開しているかを読み取ることが大切である。事実と意見を分け、書き手の意図を読み取ることがここでは学ぶ。また、社会科の公民的分野の学習では、時事問題、社会問題を新聞記事から探し、それについての価値判断、意思決定を行う学習をする。このような学習を通して、高等部では、新聞を読み解く力をつけていきたい。

以上のように、1年生から9年生まで、発達段階に応じて、新聞スクラップを共通して行い、学習内容に合わせて新聞を活用していく。3年生からは新聞づくりを通じた学習を行っていく。初等部では、「新聞に親しむ」「新聞から考える」学習を通して、情報読解力育成の基盤づくりを行い、中等部で「新聞から考える」、高等部で「新聞を読み解く」学習を通して、情報読解力の育成を図っていきたい。

次に、今年度、中高等部で行った情報読解力の育成の取り組みについて述べていく。

Ⅲ. 各学年のNIE実践の概要

1. 5年生のNIE実践

(1) 新聞スクラップ (NIEノート)

4月当初、NIE・新聞スクラップの取り組みをはじめの中で、新聞について生徒に問うてみた。「新聞は読みますか。」「新聞のどの欄を読みますか。」と。読むという生徒は半数を超えていた。しかし、「どの欄を」となると、「テレビ欄」「スポーツ欄」「四コマ漫画」といったところだった。新聞から、記事を選ぶ段階まで至っていない生徒がほとんどだ、と感じた。

そこでまず、定期的に教師から新聞記事を紹介することを始めた。大きな記事から、興味深い広告や、月の満ち欠け情報などの小さな記事まで、様々な角度から何度か紹介した。目を通しては気づかない、たく

さんの情報から新聞はできていて、そこから広がる世界の面白さに気づいて欲しかった。

取り組みとしては週1回の宿題として、「NIEノート」新聞スクラップを始めた。当初は、「何を調べばいいのかわからない」という声が多く挙がった。選んでくるものも、一番目に付く大きく取り上げられていた記事が多かった。またそこに寄せる自分の思いも、「悲しいと思った」や「すごいと思った。」など、簡単な感想で終わっていた。しかし、こちらが新聞を紹介し始めてから、地域の記事や、小さな記事にまで目を向けるようになり、そこに自分の生活や興味関心に沿った思いを添えることができるようになった。

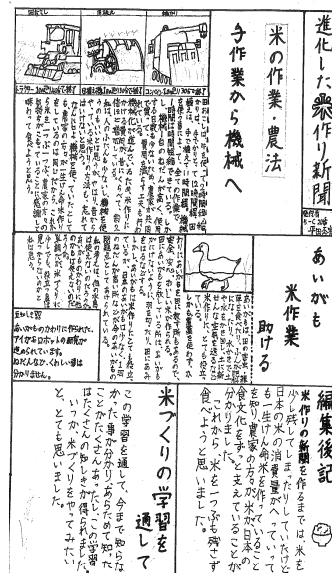


(2) 新聞づくり

新聞を読む取り組みの他に、新聞を作る活動も同時に行った。社会科では「米作り」の単元のまとめとして「米作り新聞」の作成を行った。これまで見てきた新聞を参考に、見出しや社説にこだわって、自分で資料を取捨選択し各々の視点で新聞を完成させた。さらに、イラストや図・表を加えることでより読み手を意識した、新聞を作成することができた。

この活動により、新聞は「読み手」を意識して作られていること。また、数ある情報の中から取捨選択されて出来上がっていることを体感することができた。

このような、「読む活動」と「作る活動」をスパイラルに組み込むことによって、「情報を読み取る力」の礎を築くことができるのではないかと考える。決して一方にはならない、双方向からの取り組みがよりその力を育てていくことだろう。



2. 6年生のNIE実践

(1) 新聞スクラップ

週末に自主学習で新聞スクラップを継続的に続けている生徒も多く、定期的に宿題にも出している。昨年から新聞作り方について十分に学習をしてきた学年である。そのため日々のニュースに深い関心を持ち、見出しなどを工夫しまとめることができています。また、昨年の継続的な取り組みにより、社会のニュースに対する関心が深い。印象的だったのは、2011年10月に5名ほどの生徒からTPPの参加の是非について、討論会をしたいという申し出があったことだ。それぞれ新聞やニュースの報道を1つのことに関心を持って情報を集め、そこから自分の意見を組み立てることができているのである。夏休みに京都新聞社主催の「京都新聞コンクール」「京都新聞スクラップコンクール」に取り組みさせたところ、アドバイスや教師の修正を受けていない中で、「新聞コンクール」では、京都府知事賞・京都府教育賞・京都新聞社賞・優秀賞を受賞した。また「新聞スクラップコンクール」では優秀賞3人、佳作に10人が選ばれた。6年生は夏休み中に総合学習で別の新聞づくりに取り組んでいたため、2つの作品を仕上げる負担があった中で非常によい結果を残せたといえるのではないかと。5年生の時か

らの継続的な取り組みが着実に情報を集め、問題を見つけ、考える力が育っていると考えられる。

(2) 歴史人物新聞

6年生の社会学習は多くが歴史学習の占める割合が多い。そこで単元ごとに学習した人物の功績を新聞形式でまとめる学習をおこなってきた。ここで5年生のときに習った新聞の形式を生かすように指導している。例えば、新聞Aでは、織田信長ゆかりの土地や墓を実際に訪ねて写真を新聞に張り付けている。また、見出しも「信長のここがすごい!!」と「信長のマル秘情報クイズ」を設けて、クイズでは解答を紙面の右下に設けめくってみるよう読み手を意識した紙面を工夫している。新聞Bを書いた生徒は真田幸村について伝記を読み、インターネットなどを使って多くのことを調べているなかで、情報を「真田幸村は人質だった!？」と「大阪の陣」の2点をピックアップしてまとめている。また編集後記で、「関ヶ原の戦い」の勝敗が逆転していたらという仮定に基づいて、その後の歴史がどうなるかを予測している。

このように新聞の形式を用いることで、情報の取捨選択、要約、見出しの工夫、読み手を意識した紙面構成などを通じて調べたことがより自分の知識として深められるのである。



A: 「信長の秘密新聞」



B: 「六文銭新聞」

3. 7年生のNIE実践

(1) 新聞スクラップ

7年生のNIEに対する取り組みとして継続的に行っているものに「新聞スクラップ」がある。毎月5つまで新聞記事を選び出し、それに対する気付きなどを書かせるものである。

その中で、内容をいくつかの到達段階に分けて評価をしている。①単純な感想におわってしまっている。②(記事で述べられている)課題について理解し、まとめようとしていることができる。③課題を読み取り自分の意見を持つことができる。④課題を自分の生活に結び付け、自らの生活を見直そうとしていることができる。⑤記事を批判的にとらえ多面的な視点から解決策を見つけ出すことができる(右に掲載)。このうち、7年生では①・②の段階から、③ないし④の段階へ移行することを到達目標に考えて取り組みを進めている。

10月分の到達割合としては、それぞれおよそ25%、30%、15%、25%、数%程度という状況であり、主体的に社会に参画していこうという段階への移行途上ではあるが、①②の段階の生徒にも着実な進歩もみられている。この一つの根拠として、スポーツの結果をスクラップする生徒が減ったことがあ

読んでみての自分の意見(批判)、おもしろかったことや感想、など
 今、新しいプラスチックの製法が開発されたこと書いてありますが、私は4つの疑問
 が頭にできました。1つ目は「ecoだから考えなくていい」という事ですが、たいてい環境には
 いいと思いますが、木の割り箸を使うという昔からの方法をこのあたりはいいかと思ひます。2つ目
 は「割り箸が木で出来た」という事です。元々木の材は何かに利用した木の切れ端は、高
 くない木材などを作っています。そのecoに出来るのはないのでしょうか。3つ目は「木材にも良材が
 ある」という事ですが、プラスチック製とスチール製は、木製よりも木製は全然が
 10人ほど分かります。4つ目は「時間、電気、水の消費、そして費用が色々とかかるとい
 うことは、後述の通り、たいてい、木製よりも、プラスチック製の方が、環境に優しい

読んでみての自分の意見(批判)、おもしろかったことや感想、など
 「もし信長が居たら...」という事を思いました。桶狭間の戦いの信長をあら
 たねて感じました。また、信長はうにまで水攻めをしたとは思ってなかった。その
 年の夏の暑い前にして、雨に降られて...と、それだけでも、女性断たれたらと、私の頭
 の中にも浮かびました。このように、私の頭の奥の奥の奥まで、信長が居たら...
 また、たいてい、他の「歴史上、時代の流れを大きく変えた人」について、いろいろ
 調べてみようと思います。そして、今までの銅像と違って、よく見えたことか、私の
 私の家の近くの公園の前の、銅像のなかを見ても、たいてい、私の頭を
 ぶかかると、思ひます。

げられる。自分のひいきのプロ野球チームの勝敗や選手
の活躍など日々の一喜一憂を題材に選ぶのではなく、
自分の生活にとって重要な情報を選ぶ生徒が増えて
きている。また、社会科の授業で扱った内容に関連
すること（縄文時代のカブトムシの化石の発見や桶狭
間の戦いで織田信長に関するコラムなど）や、学校
での取り組みに関すること（タイ王国との交流からタ
イ大洪水など）をテーマとしてして選ぶ生徒も増えて
きており、新聞の中の出来事と自分を結びつけて考え
られるようになってきていると考えられる。

(2) 第2回いっしょに読もう 新聞コンクール
(日本新聞協会主催)

本年度は新聞スクラップ・新聞づくりの各コンク
ールに加え、表記のコンクールに作品を応募した。この
コンクールの取り組みを通して、自分だけでなく他人
にも同じ記事を読んでもらい対話することで、同じ記
事でも違った視点ができるということに気付かせる
ことを意図した。13名が京都府内審査を通過し、うち
1名が優秀賞（表現賞）・1名が奨励賞に選ばれた。

○2011年1月1日以降の新聞から選んだ記事を家族や友だちにも見せて、意見を聞いたうえで、すべて自分で記入しよう！
① どの記事を選んで理由を書いてください (100字程度)
『お母さんがおこりに10年分感謝』という見出しに感動しました。そして小学校
という安全な場所で又安全な事件が起きていたことを知りました。その事件によって
小学2年生で思いもよらない高校3年生になった男児が事件と向き合えたことへ感謝し、選びました。
② 記事を読んで思ったこと、考えだことを書いてください (150字程度)
普通の生活をしている中で、そのような事件が目の前で起きると混乱すると思いま
したが、警察の方が怒って震える子供たちをバスに載せてあげたり制服を
かぶせてあげたことで子供たちは安心し、事件の後、健康に過ごせたのだと思
います。思い出しにくい事件だと思いますが、警察の方のおかげで10年分お母さんと
この事件と向き合い、深く考えることができ、良かったと思います。
③ 家族や友だちにも記事を読んでもらい、その人の意見を聞きとって書いてください (150字程度)
深刻な安全であるはずの学校で起きた惨劇。自分も子供ばかり、その時はまだ幼
い人の児童とその両親の悲しみも思い、本当に、どうしてこんな事件が起ったの
かと、やはり最悪な事になりました。しかし、この記事を讀んで、つらく苦しかったのは
なった児童だけではない、心を傷めた児童も同じように苦しんで来たのだ、というこ
り、警察の方を訪問して心の整理ができ、1ヶ月前後されることをうれしく思います。
④ 読んだ記事のあなたの感想や意見を書いてください (小・中学生300字程度、高校生400字程度)
3月11日に起こった東日本大震災は、一瞬にして多くの人の命や日常生活が
奪われました。世田小の事件とはかけ離れているように思いますが、どちらも普通
に生活しているところに突然おきた悲劇という点では同じです。それまでいかに
同じように食事・遊び・勉強し、普通のことを普通に生活していたのに、
突然その生活がなくなってしまうのです。
私は改めて普通に生活できることの大切さやありがたさを感じる必
要があると思います。
この犯人はすでに死刑となっています。どうしてこの事件が起きたのかは
わからないままです。命はたった一つです。その命大切でなくない命はあり
ません。この犯人の命を本当は大切な命だのです。
命大切にできることは普通の生活を送れることに感謝し一人一人が命を大切
にするともう一度このような事件が起らない強い社会をどうしたら
作っていくかを考えていこうと思います。

優秀賞の作品

4. 中等部のNIE実践

(1) 総合的な学習での新聞づくり

各グループで、家庭、学校、地域社会のどれか1つのコミュニティを選択し、コミュニティにおける問題解決
かコミュニティ活動への参加ができるテーマを決めた。テーマが決まれば、そのテーマについて、各グループで
調べ学習を行い、解決策や取り組み内容を考えた。次に自分たちが考えたことを他のグループに問題提起し、話
し合い活動を行った。さらに各自で問題解決策などを具体化し、新聞を作成した。

新聞作りは、個人で2回行った。個人で作ることにより、それぞれの課題意識を明確にさせることができる。

まず、1回目の新聞作りは、グループで話し合ったことをもとに、各個人で課題意識を持ち、その問題意識に
基づいて取材活動（調べ学習）を行い、新聞にまとめた。1回目の新聞作りでは、以下の点に留意させた。

- ① トップ記事は、コミュニティの課題、問題を提示する。見出しも問題提起型の見出しにする。
- ② なぜ課題や問題となっているのか、取材（現地調査、インタビュー、アンケートなど）をもとに、現状、
願い、原因、背景などを書く。また、そのことが分かる写真、データ（表や、グラフ）を提示する。
- ③ その課題や問題を解決する方法を自分なりに考え、提案する。その際、その解決に向けて自分が考えた方
法を実践し、その結果や感想をふまえて提案するようにする。

2回目の新聞作りは、各グループの提案が終わり、最後のまとめとして新聞を作った。2回目の新聞作りでは、
以下の点に留意させた。

- ① トップ記事は、各グループの提案、これまでの話し合いをふまえて、最も重要だと思うことを取り上げる。
- ② なぜ最も重要だと考えるのか、その理由を「社説」などの意見型記事にして示す。
- ③ 自分たちのグループの提案を実践すると共に、他のグループの提案の中から、自分の地域の課題を解決で
きるもので、自分自身でできることを選んで実践し、その結果や感想を書く。

(2) 実践事例

継続的に地域の課題を追究した生徒の場合

1回目の新聞



2回目の新聞



地域の公園にゴミが散乱していることに問題意識を持ち、公園に来ている親子連れや公園の近くに住んでいる人にインタビューをして、自分の問題意識は公園を訪れる人や公園の近くの住民も同様に持っていることが分かった。どんなゴミがどれだけ多いのか、1週間調査すると、煙草のゴミが一番多く、大人のマナーが悪いことに気づいた。また、空き缶などのゴミは、近くの自動販売機で売っているものではなく、他のところからゴミが持ち込まれていることも分かった。

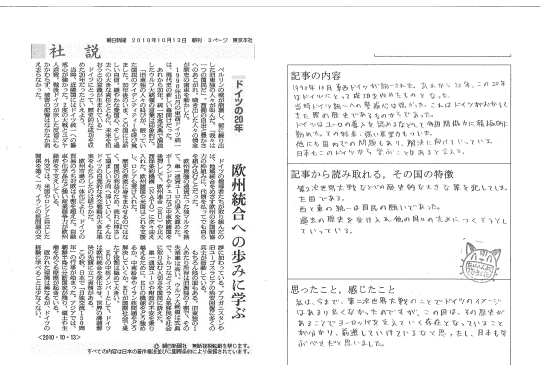
公園のゴミ問題に継続して問題意識を持ち、2回目の新聞づくりで再度、公園のゴミ調査をすると、ゴミの量や種類が変わっており、季節によって、ゴミも変化していることが分かった。他のグループのペットボトルの再利用を自分の家でも実践し、ゴミをできるだけ出さない生活やゴミを持ち帰ることを提言として訴えた。

5. 8年生のNIE実践

(1) 新聞スクラップ

社会科の地理的分野の学習で、週に一回の新聞スクラップを課題にしている。毎週テーマを与えて、そのテーマに沿う記事を探し、新聞スクラップをする。新聞記事は学習の意図によっては指定することもある。

①単元名「世界の国々を調べよう」



この単元では、中国、アメリカ、ドイツなどの世界の主な国々について、統計資料や地図帳などの各種資料を使って、それぞれの国の特徴を調べる。それらの資料の一つとして、新聞を活用する。

新聞には、今現在の世界の様々な問題がニュースとして報道されている。リアルタイムで起こっている世界各国の様々な問題をとらえることは、より正確に各国の状況を理解することに繋がる。また、社説やコラムなどで、より深く世界各国の問題についてとらえ、自分なりの考えをもつことができる。

取り上げるテーマとしては、タイの洪水、ギリシャの経済破綻などがある。

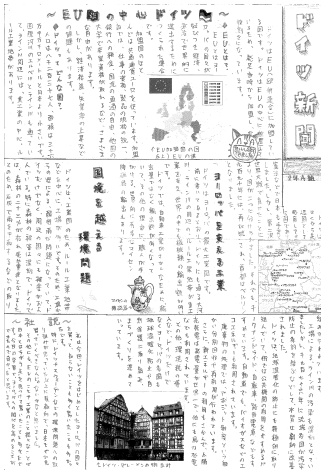
②単元名「さまざまな面からとらえた日本」

この単元では、日本の特色を、自然環境、人口、生活・文化などの視点からとらえ、各種資料を使って調

べる。新聞記事から、日本の抱える様々な諸問題を探し、学習につなげる。

取り上げるテーマとしては、買い物難民（過疎化・高齢化の問題）、不明高齢者（高齢化の問題）などがある。

(2) 新聞づくり



社会科の地理的分野、歴史的分野で学習したことのまとめとして、新聞づくりを行う。新聞にまとめることで、学習したことを整理し、再構成することができ、理解が深まる。また、わかりやすく伝えるために、写真やグラフなどを使い、資料活用能力や表現力が育成できる。

①小単元名「国を調べてわかったことをまとめよう」

中国、アメリカ、ドイツの中から、学習したことをもとに新聞をつくる。一番伝えたい記事を前の方（トップ記事）におき、見出しを決める。意外だったこと、おもしろいと思ったことなども、コラムを設けて、読者にその思いが伝わるように表現を工夫する。

インターネットで調べたことをそのまま書き写す場合があるので、学習した範囲内で書くように指示する。そうすることによって、学習したことの整理ができる。

②小単元名「地域調査に出かけよう」

地域にある近現代化遺産を探し、当時の新聞記者の立場で新聞をつくる。京都は近現代において歴史の舞台に数多くなっており、様々な史跡がある。歴史的事象はどれも大ニュースであり、そのニュースをどのように伝えればいいのかを考えることで、歴史的事象をより深く、客観的に見つめることができる。

テーマとしては、琵琶湖疏水、番組小学校、京都三大事業、水力発電、新撰組と幕末の動乱、鳥羽伏見の戦いなどがある。

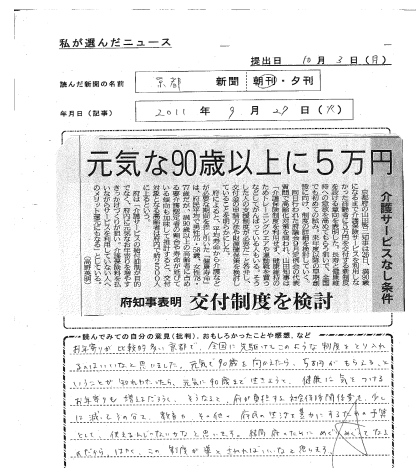
6. 9年生のNIE実践

(1) 新聞スクラップ

公民的分野では、現代社会の様々な問題について、政治的、経済的側面から検証し、社会の構成員である市民として意思決定や価値判断をしていく。最高学年である9年生では、現代社会の様々な問題に気づき、それについて自分なりの考えをもてるようにしたい。そのために、新聞を活用し、現代社会の諸問題を見つけ考えさせていく。主なテーマとしては、年金問題、介護問題、領土問題（尖閣諸島・竹島・北方領土）などがある。

(2) 社会科授業での実践 単元名「国の政治のしくみ」

この単元では、国会、内閣のしくみを学習し、国民主権のもと、民主的な政治が行われていることを学習する。野田政権ができ、組閣が行われた経緯を新聞で調べた。そうすることで、現実の政治の動きをもとに、国会や内閣の役割や働きをより深く理解することができる。世論調査の結果や社説、コラムなどから、内閣や政治にどのような期待がかけられているのかを知り、自分たちはどのような政治を求めるのかを考えさせた。



IV. 成果と課題

今年度の取組は、5年生から9年生までが新聞スクラップを共通して行い、学習に合わせて、新聞づくりや各教科での新聞活用を行った。

新聞スクラップの取組は、新聞を丸ごと使う、継続的に新聞を読むというNIEの基本ともいえる活動である。

1年だけではなかなか成果が現れてこないが、継続して行うことにより、新聞に関心をもつこと、自分に必要な情報を取り出すこと、記事を読み解くこと、社会の出来事に自分なりの意見、考えをもつことができるようになる。

5年生ではまず興味をもつ記事を集めることからはじめ、学年が上がるにつれて記事の読み取りや意見や考えをもつことを深めていく。このような発達段階に応じた新聞スクラップの取組を継続的に行っていくことが子どもたちに確かな学力をつけることになると考える。

今後の課題は、初等部での取組を中高等部に繋げるように、連携していくことである。さらに、今年度の取組を生かして、来年度さらに計画的、系統的な実践を行い、小中一貫教育としてのNIEの実践をつくりあげていきたい。

註

- 1) 橋本祥夫(2009)「新聞を活用し社会事象の読み解きに重点を置いた社会科学習の構想—小学校社会科学習を事例に—」『日本NIE学会誌』第4号, p.41
- 2) このプロジェクトは、日本NIE学会と日本新聞教育文化財団との共同研究プロジェクトである。ここでは、NIEの実践の多い、社会科、国語科、総合的な学習において NIEの教育的効果を検証することを目的としている。この共同研究のテーマとして、プロジェクトの座長を務める広島大学の小原友行氏が「情報読解力を育成するNIEの教育効果に関する実験・実証的研究」を提示した。
- 3) 影山清一郎, 小原友行, 谷田部玲生, 豊島啓司, 岸尾祐二, 有馬進一, 堤隆一郎(2009)「情報読解力を育成するNIEの教育的効果に関する実験・実証的研究—社会科チーム中間報告—」, 日本NIE学会第6回研究大会, 課題研究「情報読解力を育成する教育的効果(共同研究中間報告)」、発表資料
- 4) 同上
- 5) 小原友行(2006)「リテラシーを育成する社会科学習開発の視点」『社会科リテラシーを育成するカリキュラム・学習指導・評価方法の開発』広島大学社会科学習開発研究会, pp.1-2
- 6) 小原友行(2008)「社会科教育のどこを改善するか—公民的資質につながる「リテラシー」の育成を—」『現代教育科学』明治図書, No.620, pp.26-28
- 7) PISA 調査における「読解力」は次のように定義されている。「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」

このような定義の下で、「義務教育終了段階にある生徒が、文章のような『連続型テキスト』及び図表のような『非連続型テキスト』を幅広く読み、これらを広く学校内外の様々な状況に関連付けて、組み立て、展開し、意味を理解することをどの程度行えるかをみる。」ことをねらいとしてこの調査は実施された。すなわち、この調査は、義務教育修了段階の15歳児が、その持っている知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを評価することを目的としている。

新聞は『連続型テキスト』であり、図表などもあるので『非連続型テキスト』でもある。新聞を用いることによって、実生活、実社会の様々な場面で直面する課題に自らの知識や技能を活用する力を育成することができ、PISA型読解力の育成ができるといえる。